

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	宮内 雅弘
論文担当者	主査 木村 卓
	副査 若林 一郎
	副査 島 正之
学位論文名	注意欠如・多動症（ADHD）の併存あるいは特性が、成人強迫症患者の臨床像に及ぼす影響の横断的検討
<p style="text-align: center;">論文審査の結果の要旨</p> <p>不安症、あるいは強迫症（obsessive compulsive disorder: OCD）では様々な精神疾患の併存がみられる。児童期の不安症あるいは OCD 患者では、不注意、多動性、衝動性を中核症状とする注意欠如・多動症(Attention Deficit/Hyperactivity Disorder: ADHD)の併存が高率にみられる。ADHD は年齢とともに ADHD 症状が軽減するものの、閾値以下の ADHD 症状を成人期以降も有している割合が多いとされている。</p> <p>本研究は成人 OCD 患者を対象に、ADHD の併存を評価した。さらに ADHD の診断域には該当しないが、ADHD の重症度評価スケールである日本語版コナーズ成人 ADHD 評価スケール通常版（Conners' Adult ADHD Rating Scales : J-CAARS）CAARS の下位項目である ADHD 指標が閾値を超えていた一群を ADHD 特性群として、ADHD 併存群、ADHD 特性群、OCD 単独群の 3 群間に群別を行った。全対象者に、各患者の背景や OCD の臨床的特徴、経過を調査するとともに、うつ病や自閉症スペクトラム障害、不安障害などの精神疾患の併存についての評価を行った。</p> <p>結果、ADHD 併存群は、他群に比し、OCD が早発で、衝動性が高度であり、機能水準が低く、うつ病や物質・行動嗜癖症などの併存が高率であった。一方 ADHD 特性群では、CAARS の各下位項目に加え、これらが併存群と同程度、あるいは併存群と単独群との中間に位置し、ADHD の閾値下特性も OCD 患者の臨床像に多角的に影響する可能性が示唆された。</p> <p>本研究は、ADHD 併存あるいは閾値下特性が成人期以降の OCD 患者に影響する可能性を示している。OCD 患者を診療する際、ADHD 特性を考慮に入れることの重要性を示したものであり、学位授与に値するものと判断した。</p>	